ブラジルの経済開発とエネルギー問題

加賀美　充　洋

ブラジルの国土は，日本の約２３倍あり，人口は，８０年センサスで１億１９００万人と発表された。１人当り国民所得は，８０年で２１００ドルになり中進工業国の中で重要な役割を演じている。ところが，この南米の巨人にもアキレス腱があり，それが石油であった。

ガイゼル政権下で行なわれた『第２次国家開発計画，１９７５～７９年』は，いわゆるブラジルの奇跡（６８年から７３年にいたる，ＧＤＰ実質成長率１０％の高度成長）を下地にしていたため，経済成長率（年率１０％の計画値），輸出伸び率（同２０％）等過大推定になっていた。７３年１２月のＯＰＥＣによる原油価格値上げ，７９年６月における原油価格再引き上げ，さらに８０年９月におけるイラン－イラク戦争勃発により，石油消費の８割５分を輸入（輸入日量約１００万バーレルのうち，イラクから４０万バレル輸入）にたよっているブラジル経済は大きな影響を受けた。

第１表は，７３年から８０年までの主要経済指標をみたものである。これか

第１表　ブラジルの主要経済指標

	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980•
(1) ＧＤＰ実質成長率(％)	14.0	9.8	5.6	9.0	4.7	6.0	6.4	8.5
(2) 総合物価指数(対前年12月比，％)	15.5	34.5	29.4	46.3	38.8	40.8	77.2	110.2
(3) 通貨供給量残高伸び率(％)	47.0	33.5	42.8	37.2	37.5	42.2	73.6	70.6
(4) 石油輸入額(原油および石油関連品，FOB億ドル)	7.1	28.4	28.8	36.1	38.1	42.0	65.0	110
(5) 貿易収支(億ドル)	＋0.07	−46.90	−34.99	−22.55	＋0.97	−10.24	−28.40	−33.00
(6) 経常収支(億ドル)	−16.88	−71.22	−67.12	−60.17	−40.37	−69.90	−107.42	−127.00
(7) 総合収支(億ドル)	+21.79	− 9.36	− 9.50	+11.92	＋6.30	+42.62	−32.15	28.00
(8) 対外準備残高(億ドル)	64.16	52.69	40.41	65.44	72.56	118.95	96.90	69.11
(9) 対外債務残高(億ドル)	125.72	171.66	211.71	259.85	320.37	435.11	499.04	544.00

• 予想値

（出所）Boletim do Banco Central do Brasil, Jan., 1981 等。

らもわかるように，オイルショックの影響は，貿易収支の大巾赤字，対外債務累積（サービス収支は赤字なので，貿易収支と合せた経常収支の大幅赤字を資本流入によって埋め合せるという国際収支上の構造的パターンが債務累積を増加させた），およびインフレーションの再燃に現われている。この結果，経済成長率は，計画期間中年率6.2％に減速し，目標値の年率１０％は達成できなかった。

フィゲイレド現政権（７９年３月から８５年３月まで）の『第３次国家開発計画，１９８０～８５年』は，①エネルギー危機の存続，②国際収支の危機的制約，③対外債務の増大圧力，④重大なインフレ圧力，⑤雇用創出のために成長政策が必要，等の条件が継続するかぎり，ブラジル経済は不安定性から脱却できず，将来の約束や厳密な達成目標を導き出すのは困難として，計画数値のでてこない特徴的な計画書になっている。これは逆に，ブラジルの当面するエネルギー問題が非常に深刻であることを物語るものであろう。

エネルギー事情

先ずブラジルにおける１次エネルギーの消費構造を１９７８年においてみると，第２表のようになっている。石油消費のシェアが４２％に達し，次が水力の２６％，および薪１９％と続く。

第１次石油危機以前の７０年における石油依存度は，３８％であったので，エネルギー源としての石油依存は近年むしろ増えたといえる。

石油消費の約半分は輸送用に回されている。ブラジルは国土が広く，鉄道があまり発達していないので，人および物の輸送は，道路にたよることになる。７７年の旅客輸送をみると，道路９５％，鉄道３％，および航空２％となっており，貨物輸送は道路７０％，鉄道１７％，船舶１０％，および航空３％のシェアで行なわれた。道路輸送が主役なので結局，ガソリン，およびジーゼル油への需要が多くなっている（石油製品消費に占めるガソリンのシェアは，７９年で２１％，およびジーゼル油２８％であった）。

ブラジルの原油生産は，７９年で日産約１７万バレルであった。輸入平均日量が同年１００万バレルなので，自給率は約１５％である。このため政府は，石油開発に重点を置いており，８５年の目標生産量を日産５０万バレルとしている（輸入量は約５０万バレル／日に落とすつもり，なお８０年後半から日産

第２表　１次エネルギーの消費構造

（単位：石油換算トン，1.000ＴＰＥ）

		1978 内訳	シェア（%）
再生不能エネルギー	石油	46.180	42.0
	天然ガス	531	0.5
	石炭	4,723	4.3
	ウラニウム	—	—
	小計	51.434	46.8
再生可能エネルギー	水力	29,032	26.4
	アルコール	1,201	1.1
	バガス	5,058	4.6
	薪	20.676	18.8
	木炭	2.558	2.3
	小計	58.525	53.2
	合計	109,959	100.0

（出所）　Energia 80 より。

量は２０万バレルを超えたといわれる）。

次に政府が力を入れているのがアルコールによる石油代替である。７５年から同国は『国家アルコール計画（ＰＲＯＡＬＣＯＯＬ）』を進めており，８０年の目標アルコール生産量３０億ℓに対し，７９／８０農業年の生産は３３億９３２１万ℓあった。主に砂糖きびからできるこれらアルコールは，ガスホールとしてガソリンに約２０％混入する他，工業用として用いられている。フィゲイレド政権も同計画を強力に推進する予定で，８５年の目標生産量を１０７億ℓと計画している。これは石油換算で日産約１７万バレルと推定される。

ブラジルでポテンシャルの高い水力発電に関しては，７９年の総発電量１２４６億８２００万KWHのうち水力が９２％のシェアを占めた。水力の推定ポテンシャルは２億９００万KWといわれ，現在まだその１０％しか利用されていない。原子力発電に関しては，Angra dos Reis の１号炉（ウェスチングハウス製）の建設が遅れており，試運転は８１年９月頃になる予定である。

その他石炭埋蔵量約２１８億トン（７９年の石炭生産は４８２万トン，全消費量の約５５％を輸入），オイルシェールの埋蔵量約５３２４億㎥，およびウラニウム埋蔵量約６万７０００トンといわれ，ブラジルのエネルギー資源ポテンシャルは高いにもかかわらず，その実現性に関しては，石油の代替として決定打がない情況である。それ故にブラジルのエネルギー危機は苦しい状態がしばらく続くものと思われる。